

く す り ば こ



59. 漢方薬「基本のき」

漢方薬は現在では医療機関で処方されたり、薬局でも購入でき、一般に広く用いられている薬です。

「生薬が入っていれば、漢方薬なのよね」、「民間薬と同じようなものでしょ」、「漢方薬なら副作用がないでしょう」と質問される事が時々あります。

そもそも生薬とは何でしょう？生薬は自然界の動植物のうち、薬効成分をもつ部分をそのまま薬品として、あるいは製薬の原料として、利用できるようにしたものをいいます。最も多いのは草木類で根、樹皮、葉、果実、花、種子等。動物の皮、骨、内臓の他、きのこ類、昆虫、貝殻、鉱物の一部も利用します。

例を挙げると、菊の花(茵陈蒿)、キハダの樹脂(黄柏)、葛の根(葛根)、ショウガ(生姜)、アズキの種子(杏仁)、ロバなどの皮や骨髄から作る膠(阿膠)、シカの角(鹿茸)、ウシの胆嚢にできた結石(牛黄)、ミミズ(地竜)、カキの貝殻(牡蛎)、セミの抜け殻(蝉退)、含水硫酸カルシウム(石膏)、サルノコシカケ科マツホド(茯苓)などがあります。では生薬を利用する民間薬と漢方薬は同じなのでしょうか？

民間薬は一般的にその地域毎に手近な薬効のある自然物を薬品として経験的に伝承されてきたものと考えられます。どの位の量をどう服用すればよいか曖昧で、地域差もみられます。つまり用量や適応、効果について統一した理論や意見がありません。

また民間薬は一病一薬。数種類の生薬を配合することもなく、通常、一種類の生薬を用います。例えばセンブリは健胃に、ゲンノショウコは下痢止めにと決められています。

しかしかなりの効果がみられる民間薬もあり、ドクダミ(十薬)、ハトムギ(ヨクイニン)のように漢方薬として応用されている民間薬もあります。

さて、漢方薬とは、漢方という中国から伝来の治療法【鍼灸、按摩、薬膳療法(食養、食療)、気功、湯液(薬物療法)】のうち、薬を用いる治療法です。

その中国伝来の薬である漢方薬ですが、疑問の一つ「生薬が入っていれば漢方薬」は一部は当たっていますが、十分ではありません。漢方薬は東洋医学理論に基づき構成されたもので、定まった方剤名(処方名)があり、通常数種類の生薬によって成り立っています。各生薬の用量も決まっており、理論に基づき一定量の特定生薬の組み合わせによって各方剤の薬効が発現されます。例えば、葛根湯という処方基本として、葛根4g、麻黄3g、大棗3g、桂皮2g、芍薬2g、甘草2g、生姜1gを配合しています。漢方薬に使用されている生薬が配合されているから漢方薬ではなく、そのような場合は何種類かの生薬が配合されている薬といえます。

中国の伝統医学の大本が完成したのは紀元前後、漢時代でした。漢方という言葉はこれに由来していません。

6世紀頃日本に伝来し、10世紀から独自の診断・処方が加えられて日本流の体系化が進み、江戸時代には最盛期を迎えました。その後、明治期には一時衰退しましたが、近年になって広く見直されています。

又、「副作用がない」とは言えません。病状や病態に合わない場合や、体質によってはいわゆる副作用が現れる事もあります。

やはり漢方薬についてはきちんと医師に診断してもらい、自分自身に合った漢方薬を処方してもらうのが良いのではないのでしょうか。



薬剤部 林 万起子